# テーベ西岸の岩窟墓におけるアマルナ時代直前の変化

近藤二郎

## はじめに

本稿では、古代エジプト新王国第十八王朝の「アマルナ時代」直前のネクロポリス・テーベ地域における大型岩窟墓の変化を検討することで、当時のエジプト社会で起きた動きを明らかにすることを目的としている。

古代エジプト新王国時代における最大の変革期は、言うまでもなく、「アマルナ時代」である。このアマルナ時代は、第十八王朝の十代目（ハトシェプストを含む）の王であるアメンヘテプ四世（在位：前一三五一～前一三三四年頃（Beckerath, J. von 1999）が、王都をテーベ（古代名ウアセト、上エジプト第四ノモス）から中部エジプトのテル・アル＝アマルナ（古代名アケト・アテン、上エジプト第十五ノモス）へ遷都した時期を言う。同王の治世五年以降に新都の建設が開始された。新都は古代名が「アテンの地平線」を意味するアケト・アテンと称する。これはアテン神の世界を意味する。この地が、どの神にも属さない地であるとされたが、上エジプト第十五ノモスの州都ヘルモポリス（古代名ケメヌウ、現在名アル＝アシュムネイン）の対岸（東岸）に位置しており、この地の主神トト（古代名ジェフウティ）の支配領域であった。

北の拠点メンフィスと南の拠点テーベとを直線で結ぶとその中央にアマルナが位置していることは、多分に示唆的である。古代エジプトの南北の二大拠点の双方の影響力を相殺して、独自の改革をエジプト国内で実行に移すには、

アマルナがある場所が、唯一の場所であったと考えられる。ただし、新都アマルナの位置が、メンフィスとテーベという古代の両都市の丁度真ん中にあることを考えると、この時期に、メンフィスとテーベの双方の都市の勢力が概念的にも同規模であったと考えることができる。このことから、アマルナへの遷都の理由としては、テーベ東岸のカルナク、アメン大神殿を拠点とするアメン神官団の権力が非常に大きなものとなったために、それを避けるためにテーベから遠く離れた中部エジプトのアマルナに遷都したことばかりが強調されてきた。しかし、中部エジプトのアマルナへの遷都は、南部エジプトのテーベのアメン神官団だけでなく、北部のメンフィスのプタハ神官団の影響力の排除をも意味していた。つまり、旧来の古代エジプトの宗教や政治からの独立を意図していたものと言えよう。

つまり、アマルナの改革とは、単なるアテン神を唯一神とする宗教改革というより、古代エジプトの旧秩序からの独立と新秩序の創造を目的としたものでもあったのだ。

また、同様に所謂「アマルナの宗教改革」は、異端王のアメンヘテプ四世（後のアクエンアテン王）による狂信的な動きとして捉えられ、同王の死後、再び元の秩序に復帰したとする考えが支配的であったが、実際には、一時的なものではなく、極めて大きな「変革期」であったと位置付



けるものである。このことは、アマルナ時代以後になり、太陽神であるラー・ホルアクティを中心とする多神教社会への転換、新エジプト語の使用など、さまざまな分野で、アマルナ時代以前と比較して、大きな変化が見られることからも説明することができる。

## 一．テーベのアメン神官団への牽制の動き

ハトシェプスト（在位：前一四七九／七三～前一四五八／五七年頃）とトトメス三世（在位：前一四七九～前一四二五年頃）の治世には、トトメス三世の即位、カルナク、アメン大神殿を中心とするテーベにおける神殿配置などのレイアウトの誕生（近藤　一九九六）、オペト祭の年中行事化、トトメス三世が単独の王位に就いてからの十七回にも及ぶアジアへの軍事遠征による、アメン・ラー神に対する莫大な寄進などアメン神の聖地であるテーベ、カルナクのアメン大神殿やアメン神官団の権力は絶大なものになっていった（近藤　一九九八）。

こうしたテーベのアメン神官団の権力の増大は、王の側からの反撃を生じさせることとなった。そうした契機は、アジアに対する軍事遠征の活発化などから北のメンフィスの役割の増大に伴って、採用された「南北二人宰相制度」

などがその背景として考えられる。

アメンヘテプ二世（在位：前一四二八～前一三九七年頃）の死後、トトメス四世（在位：前一三九七～前一三八八年頃）が即位したが、トトメス四世は、王位継承権が比較的低い王子であったようだ。そのことは、アル＝ギーザ台地の大スフィンクス像の前脚の間に建立された赤色花崗岩製の「スフィンクス夢の碑文」からうかがうことが出来る。この碑文によると、王子トトメス（後のトトメス四世）が、ある日、アル＝ギーザの大スフィンクスの日蔭で昼寝をしていた時に、夢に大スフィンクスが登場して、次のように述べたのであった。「私を見なさい、王子トトメスよ。私は、お前の父のホルエムアケト・ケペリ・ラー・アトゥム神である。私は、お前に王権を与えよう。お前は、上下エジプト王冠を被ることになるであろう。」(Bryan, B. M. 1991)

この碑文から、トトメス四世の即位に際し、太陽神ラー・アトゥムの崇拝の中心地ヘリオポリス（古代名イウヌウ）の太陽神官団の強力な後ろ盾があったことが推定される。つまり、トトメス四世は、即位時からテーベのアメン神官団とは対立関係にあったと考えられる。

トトメス四世の父アメンヘテプ二世も、トトメス三世とメリトラー・ハトシェプストの間に誕生した王子であったが、メンフィスで誕生したと考えられている。

トトメス四世治世下のアメン大司祭は、アメンヘテプ二世治世の末期から引続いてアメンエムハトが務めていた。アメンエムハトの前任のアメン大司祭は、メリであり墓は第九五号墓である。アメンエムハトの墓である第九七号墓は、四本の角柱を持つ奥室を持つ構造をしており、シェイク・アブド・アル＝クルナ地区に位置している。

また、トトメス四世は、それまで慣例的にアメン大司祭が任命されていた上下エジプト神官長の職にアメン大司祭のアメンエムハトではなく、王の徴兵書記ホルエムヘブを任命している。ホルエムヘブは、トトメス三世からアメンヘテプ三世の治世にかけての人物で、彼の墓であるテーベ第七八号墓には、四人の王の名を記したカルトゥーシュが描かれている（Brack and Brack 1980）。

そして、宰相としては、ヘプウが知られ、彼の墓（第六六号墓）もシェイク・アブド・アル＝クルナに位置している。ヘプウの葬送コーンはD＆M五八三号である。このコーンには、「市長、宰相、ハプウ、声正しきもの」と記されている（Davies and Macadam 1957）。

アメンヘテプ三世時代には、王とアメン神官団との対立は一層顕著なものとなっていく。アメンヘテプ三世の治世前半のアメン大司祭は、プタハメスであるが、彼はトトメ

ス四世時代から王に仕え、アメンヘテプ三世の治世一〇年までに、南の宰相、テーベ市長、アメン大司祭の職に就いていた。B・M・ブライアンは、プタハメスが既にトトメス四世の治世に、宰相とアメン大司祭の地位に就いていたとしている（Bryan 1991）。

プタハメスの岩窟墓は未発見であり、彼の葬送用コーンとしてD&M一四六号とD&M一七九号の二種類が存在しており、それらに刻された銘文から、プタハメスは宰相とテーベ市長の両方の称号を有していたことが知られている（Davies and Macadam 1957）。

プタハメスの次のアメン大司祭には、カルナクのアメン神殿内部で昇進したアメン神官のメリプタハが、王の治世二〇年までに就任していた。メリプタハは、「全て神々の神官長」の称号を有してはいたが、アメンヘテプ三世は上下エジプト神官長の職に、王の長子で、メンフィスのプタハ大司祭であった王子トトメスを任命している。

また、アメン大司祭メリプタハに次ぐアメン第二司祭の地位には、王妃ティイの弟のアアネンを任命するなど、王に近い人々に重要な神官職を与えることで、アメン神官団の勢力を牽制しようとしたとみられる。

アメン大司祭のメリプタハの墓も未発見であり、詳細は不明である。メリプタハが、アメンヘテプ三世の治世下で知られる最後のアメン大司祭である。そして王の晩年には、宰相であったラーメス（ラモーゼ）が、上下エジプト神官長の地位にあった。

アメンヘテプ三世治世下には、低い身分の出身ながらも、多くの有能な人材が王家に登用されている。そうした代表的な人物に、王の徴兵書記であるヘプウ（ハプ）の子、アメンヘテプや王妃ティイの家令のウセルハトなどがいる。アメンヘテプの父ヘプウは、下エジプトのアトリビスの出身で、記すべき称号のない低い身分の出身であったが、その子、アメンヘテプは、王の書記として登用された後に王の徴兵書記として活躍し、王の右の扇持ち、王女サトアメンの家令、王の全ての作業の監督官などの要職を歴任した。カルナクのアメン大神殿やルクソール神殿、メムノンの巨像で有名な王の記念神殿の建設において多大な貢献をしたことで、自らの葬祭殿を建設する許可を得るなど王の特別な寵愛を受けた人物であった（近藤　一九九八）。

アメンヘテプ三世治世の晩年（治世三〇年以降）には、多くのメンフィス出身者を積極的に登用し、同王の三回にわたるセド祭（王位更新祭）が行われたテーベに招聘している。王の晩年の宰相のひとりであるラーメスの父ヘビは、アメンヘテプ三世治世の初期のメンフィス市長であった。また。メンフィスの大家令であったアメンヘテプ・フイも

ヘビの息子でありラーメスとは異母兄弟であった。さらに、前述のアメン大司祭に任命されたプタハメスもメンフィスの出身者と推測され、アメン・ラー神の宗教センターであるテーベに、アメン神官団の力に対抗するために、テーベと並ぶ北の拠点都市メンフィス出身の勢力を積極的に登用することが行われている。

## 二　第十八王朝時代における大型岩窟墓について

D・アイクナー（Eigner, D.）は、第十八王朝アメンヘテプ三世（在位：前一三八八～前一三五〇年頃）治世末の宰相アメンヘテプの未完成の大型岩窟墓の論文の中で、ネクロポリス・テーベに位置する大型岩窟墓の平面プランを示している（図1）（Eigner 1983）。この図を見ても明らかなように、前室に二列以上の柱を持つ構造の岩窟墓の大部分が、アメンヘテプ三世～アメンヘテプ四世時代に集中していることがわかる。

フリーデリケ・カンプ（Kampp, Friederike）が、タイプⅧと分類した岩窟墓である（Kampp 1996）。カンプによれば、前室に一列が四本以上で、二列以上の柱を持つタイプⅧの岩窟墓は、シェイク・アブド・アル＝クルナ地区に位置するアメンヘテプ二世治世のアメン大司祭メリの墓（第九五号墓）を除けば、他の時期の判明している岩窟墓は、全てアメンヘテプ三世治世以後のものである。

図1のa、b、cの三基の岩窟墓は、アメンヘテプ三世治世末期～アメンヘテプ四世治世初期かけての大型岩窟墓で、いずれも前室に三列以上の柱を持つもので、aとcが左右五本ずつの十本三列の三〇本の柱、bが左右四本ずつ八本四列の三二本の柱を持つ構造となっている。また、hのアメンエムハト・スレル墓（第四八号墓）もまた、各部屋に多数の柱を持つ同様な大型岩窟墓である。

そしてd、e、f、gの四基の岩窟墓は、いずれも前室に左右四本（gの第二七一号墓は左右五本）二列の一六本ないし二〇本の柱を持つ構造となっている。

図1の中で、kのアメンヘテプ三世治世下のウセルハト墓（第四七号墓）の精度には問題がある。この平面プランは、古い記録を参考にアイクナーにより作成されたものである。このウセルハト墓（第四七号墓）は、早稲田大学のエジプト調査隊が、一九八〇年代にアメンヘテプ三世治世前後の岩窟墓の比較調査（Sakurai, Yoshimura and Kondo 1988）を実施した時点で、既にアクセスが出来ない状態にあり、再調査を実施する準備をしていた。

カンプは、カーターやアイクナーのデータをもとにウセルハト墓（第四七号墓）の平面図を公表しているが（図

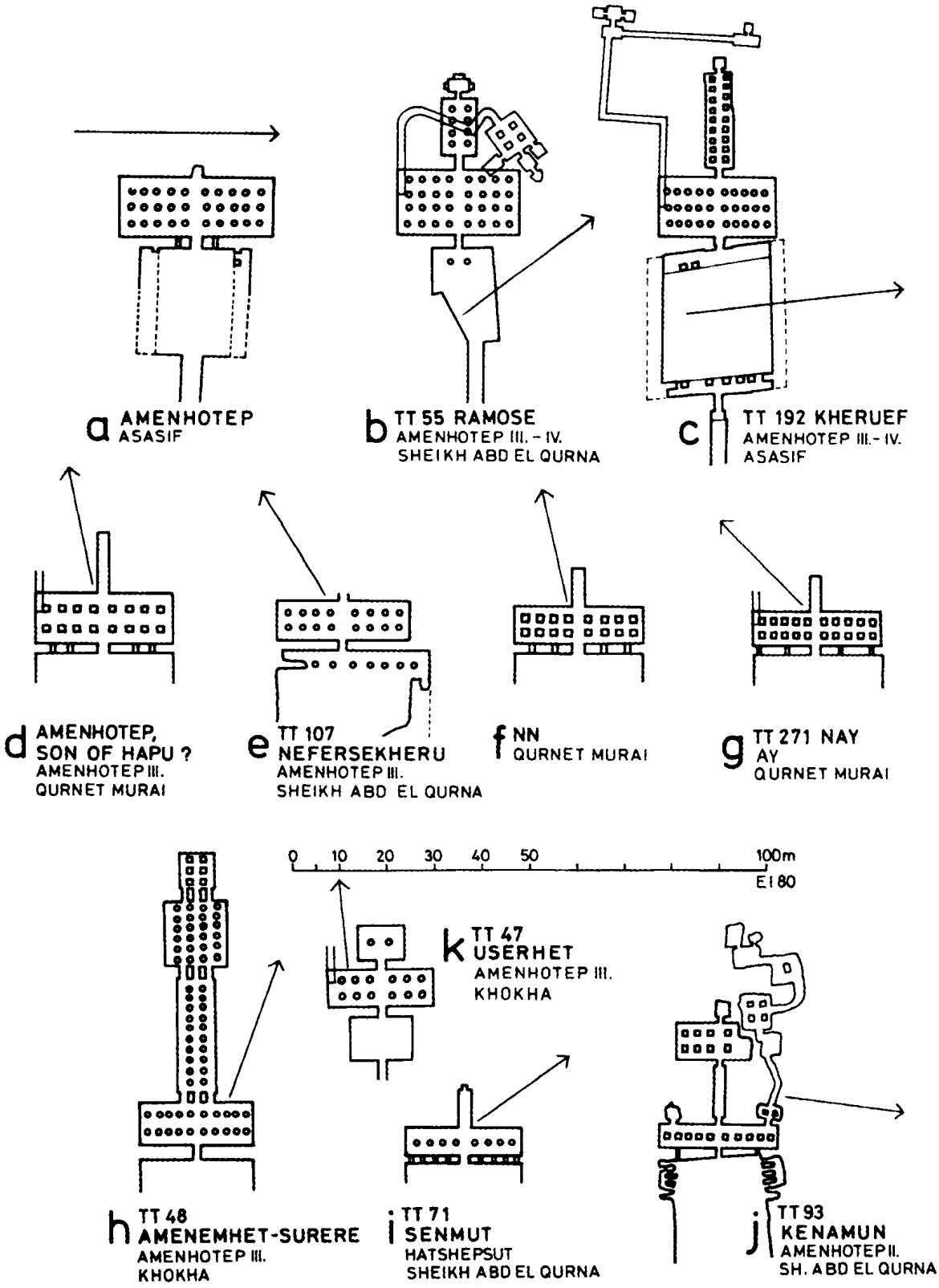


図１　ネクロポリス・テーベの大型岩窟墓の平面プラン（Eigner 1983, Abb. 5）

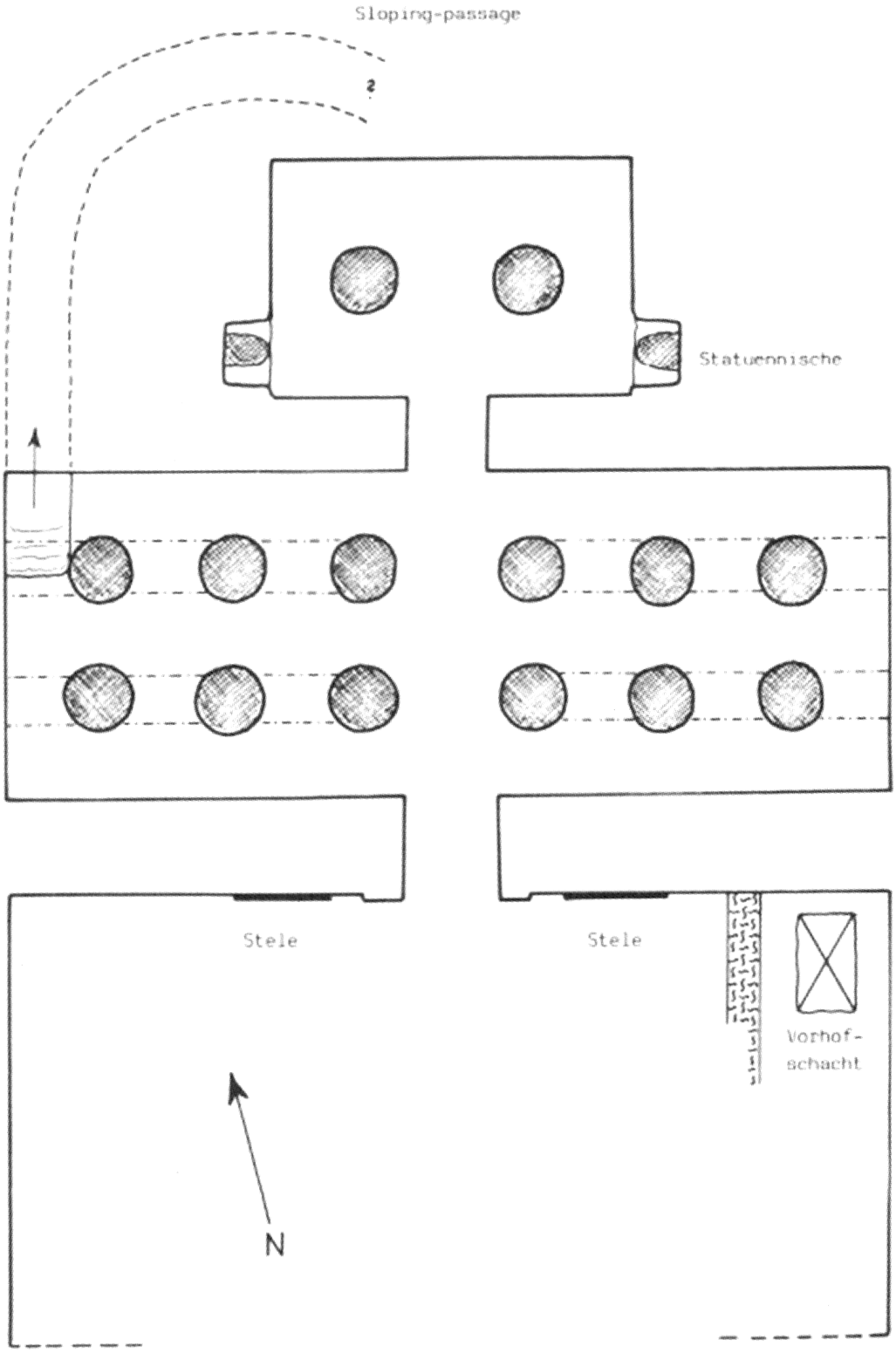


図２　ウセルハト墓（第 47 号墓）の平面プラン（Kampp 1996, Fig. 144）

2、Kampp 1996)、調査に基づくものではないので、墓の方位も構造も不正確なものであった。

## 三、ウセルハト墓（第四七号墓）の再調査

ウセルハト墓（第四七号墓）関する最古の記述は、一八六二年のスコットランドのA・H・ラインド（Rhind, A. H.）のものである。日本では、リンドの名で知られるラインドは、健康を害したことにより、一八五五～五六年と翌年の一八五六～五七年の冬季に、暖かなエジプトのルクソールに転地療養を目的として滞在していた。ラインドは、彼の著作に、第四七号墓の被葬者ウセルハトの葬送用コーン（Davies & Macadam 1957）のスケッチを掲載している。さらに注目すべきことに、ラインドは、この葬送用コーンが墓の正面上部に設置され、総数が九〇個であると記録している。また、この墓の前庭部において、ミイラ・ピットを発見したことにも言及している（Rhind 1862)。

ラインドが、ルクソールに滞在し、第四七号墓に関する情報を記してから四十六年後の一九〇二～〇三年に、簡単な発掘調査が、当時のクルナ（al-Qurna）村のオムダ（umda 村長）によって実施された。この発掘調査は、オムダが自分の家の裏手五〇メートルほどに位置する墓（ウセルハト墓）を開ける許可をエジプト考古局に申請して実現したものである。オムダの申し出に対して、エジプト考古局は、監視を派遣することを条件として発掘を認めている。

黒板勝美は、一九〇九（明治四十二）年に、ルクソール西岸の遺跡を見学した際に、このオムダの家に宿泊している。その時の様子が『考古学雑誌』に報告されており、大変興味深い（黒板　一九一一）。

この発掘の詳細については、H・カーターが、『エジプト考古局年報』第四巻の「上エジプトにおける作業報告」の中で述べている（Carter 1903)。この報告は、ウセルハト墓（第四七号墓）の規模と構造を、その細部の寸法とともに具体的に記している唯一の資料であるが、墓の平面プランなどは載っていないために、墓の方位や構造の詳細に関して詳細は不明なままであった。カーターによる第四七号墓の規模と構造、内部のレリーフ装飾は、以下の通りである。

前庭部は十三メートル×九メートルの規模を測る。前室は二十二メートル×八メートルで、六本の柱が二列、すなわち十二本の柱をもつ構造であった。第二室（奥室）は、一〇メートル×七メートルの規模で、部屋の内部には二本のロータス柱があるとしている。壁面装飾に関して、前室の壁面の大部分は、碑文もレリーフもなかったとしてお

り、前室の奥壁の南側部分には、キオスクの天蓋の下に並んで腰掛けるアメンヘテプ三世と王妃ティイのレリーフがあったとされる。ハワード・カーターは、この天蓋の下に腰掛ける王妃ティイのレリーフの写真（図3）を『エジプト考古局年報』第四巻に掲載している。

この王妃ティイのレリーフは、その後、王妃の顔の部分だけが切り取られ、エジプトの国外に持ち出されてしまった。現在では、ベルギーのブリュッセルの王立美術歴史博物館に収蔵・展示されている（図4）。

一九〇二～〇三年にオムダ（村長）が発掘調査を実施した後、一九〇八年夏に、主任査察官であったウェイゴール（Weigall, A. E. P. 1908）が、シェイク・アブド・アル＝クルナ地区とアル＝アサシーフ地区の岩窟墓の登録作業を実施し、第四五号墓～第一〇〇号墓までの五十六基の墓の状況を報告しているが、カーターが報告したアメンヘテプ三世の王妃ティイの肖像を描いたレリーフに関する記載はなく、既にこの時点で国外に流出した可能性があり、極めて早い段階で遺跡の破壊と略奪が行われたものと思われ

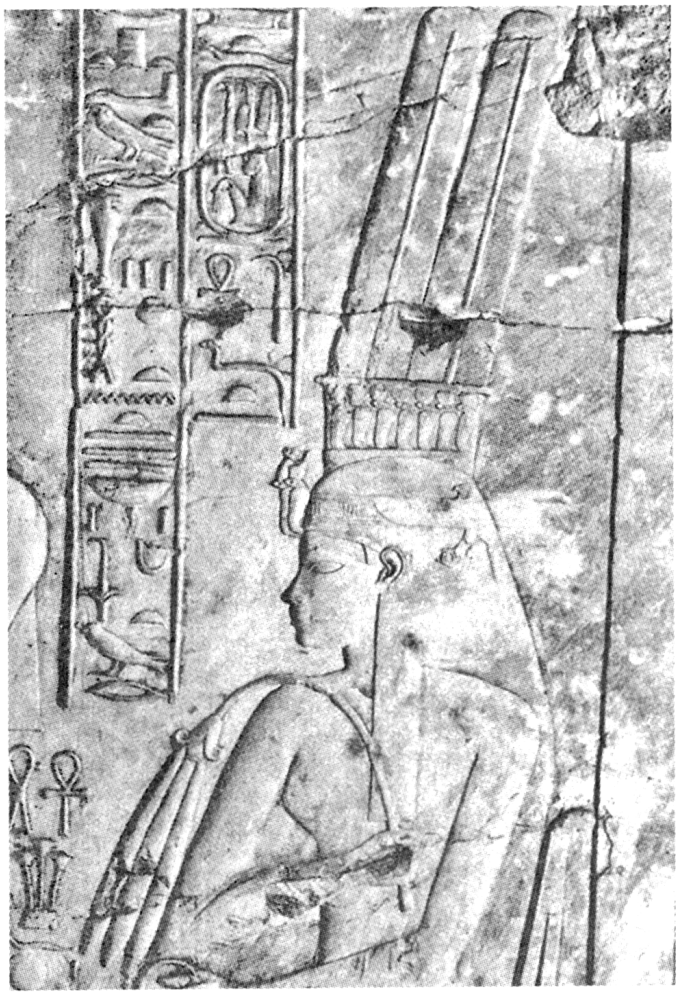

図3　ウセルハト墓（第47号墓）内部の王妃ティイのレリーフ（Carter 1903, Tf. II）

図4　ブリュッセル、王立美術歴史博物館所蔵の王妃ティイのレリーフ（E.2157）

る。

このベルギー、ブリュッセルの王立美術歴史博物館所蔵の「王妃ティイのレリーフ」は、二〇一五年七月から十二月にかけ、東京（東京国立博物館）と大阪（国立国際美術館）で開催された『クレオパトラとエジプトの王妃展』に出品展示された（近藤［監修・執筆］二〇一五）。

その後、ウセルハト墓（第四七号墓）は、厚い堆積砂礫に覆われてしまいアクセスできない状態になってしまった。このウセルハト墓の位置する北側には、岩窟墓を利用して住民が居住していたため、この地域全体の発掘調査を実施することは長年にわたって困難な状況にあった。

しかしながら、二十一世紀に入るとルクソール西岸地域において、ルクソール市当局により、岩窟墓が分布する地域に居住している住民の民家の強制的な撤去が実施されるようになり、アル＝クルナ村北のアル＝ターリフ地区の北側の地区への大規模な移住計画が実行に移され、新クルナ村（後に新クルナ市）の建設が開始された。

アル＝コーカ地区においても、ウセルハト墓（第四七号墓）が位置する場所付近に存在していた民家の強制撤去が実施されたため、二〇〇六年に、エジプト考古庁（現在のエジプト考古省）に調査の申請を提出し、正式な調査許可を取得することで、本発掘調査を実施できることになった。

二〇〇七～一〇年度の科学研究費補助金（基盤研究(B)）課題番号19401034「古代エジプト新王国第一八王朝時代後期の岩窟墓の調査研究」（研究代表者：近藤二郎）の助成を受け、二〇〇七年十二月からウセルハト墓（第四七号墓）の再調査を開始した。二〇〇七年十二月の現地調査に先駆けて、前年の二〇〇六年十二月に現地で調査地区周辺部の観察を実施し、調査地区の設定をおこなった。

第一次調査は、二〇〇七年十二月から一月にかけ実施した。第四七号墓の北側に位置する四基の岩窟墓（第一七四号墓、第‐六二‐号墓、第二六四号墓、第‐三三〇‐号墓）のクリーニング調査も併行して実施した。これまでに、第四七号墓の調査は、第一次～九次調査を毎年冬に継続して実施している。二〇一一～一四年までの調査は、早稲田大学の特定課題研究（2011B-024、2012B-026、2013B-033、2014B-056）による助成を受けている。また、二〇一五年度からは、（基盤研究(A)）課題番号19401034「古代エジプト新王国第一八王朝時代後期の岩窟墓の調査研究」（研究代表者：近藤二郎）の助成を受け第二次調査（二〇〇八年十二月～二〇〇九年一月）で、第四七号墓の再発見に成功し、同墓の入口上部（リンテル）に施されたレリーフを発見することができた。この発見により、ウセルハト

図5　ケルエフ墓（第192号墓）入口上部のレリーフ装飾（The Epigraphic Survey 1980, Pl. 8）

墓の主軸線が、これまで考えられていた南北ではなく、東西であり、岩窟墓の入口がアマルナ時代直前の他の大型岩窟墓と同様に、東に向かっていることが判明した。

発見された入口上部のレリーフ装飾では、中央にアメンヘテプ三世の即位名を刻したカルトゥーシュ（王名枠）が位置し、向かって右側には、太陽神アトゥムが腰掛け、その後方には西方の女神が立っている。さらに、その右側には、この墓の被葬者であるウセルハトが、アトゥム神に対して両手を挙げた礼拝のポーズをとっている。一方、向かって左側には、ハヤブサ頭の太陽神ラー・ホルアクティ神が腰掛け、その後ろにマアト女神が立っている。これと酷似した装飾は、ケルエフ墓（第一九二号墓）の入口上部に見られる（図5）。

ウセルハト墓（第四七号墓）では、アトゥム神の後方に西方の女神が立っているが、ケルエフ墓ではハトホル女神となっている。また、ウセルハト墓では、墓の被葬者であるウセルハトが太陽神を礼拝しているのに対して、ケルエフ墓では、被葬者のケルエフではなく、アメンヘテプ三世の息子のアメンヘテプ四世と王の実母である王妃ティイが描かれている。このようにウセルハト墓の入口の上部に施された装飾は、ケルエフ墓のものとほぼ同じ構成になっており、アメンヘテプ三世治世最末期に位置付けられることを示している。

岩窟墓の正面に、アトゥム神やラー・ホルアクティ神といった北のヘリオポリスの影響を強く受けた太陽神を描き、ナイル東岸から昇ってくる日の出の太陽の光を真正面から受けるように岩窟墓のプランが東向きに作られていることは、非常に興味深い。また、ネクロポリス・テーベにおいて太陽神アテンが登場する前に、アトゥム神とラー・ホルアクティ神という北のヘリオポリスで崇拝されていた太陽神の姿で装飾されていることは興味深い。

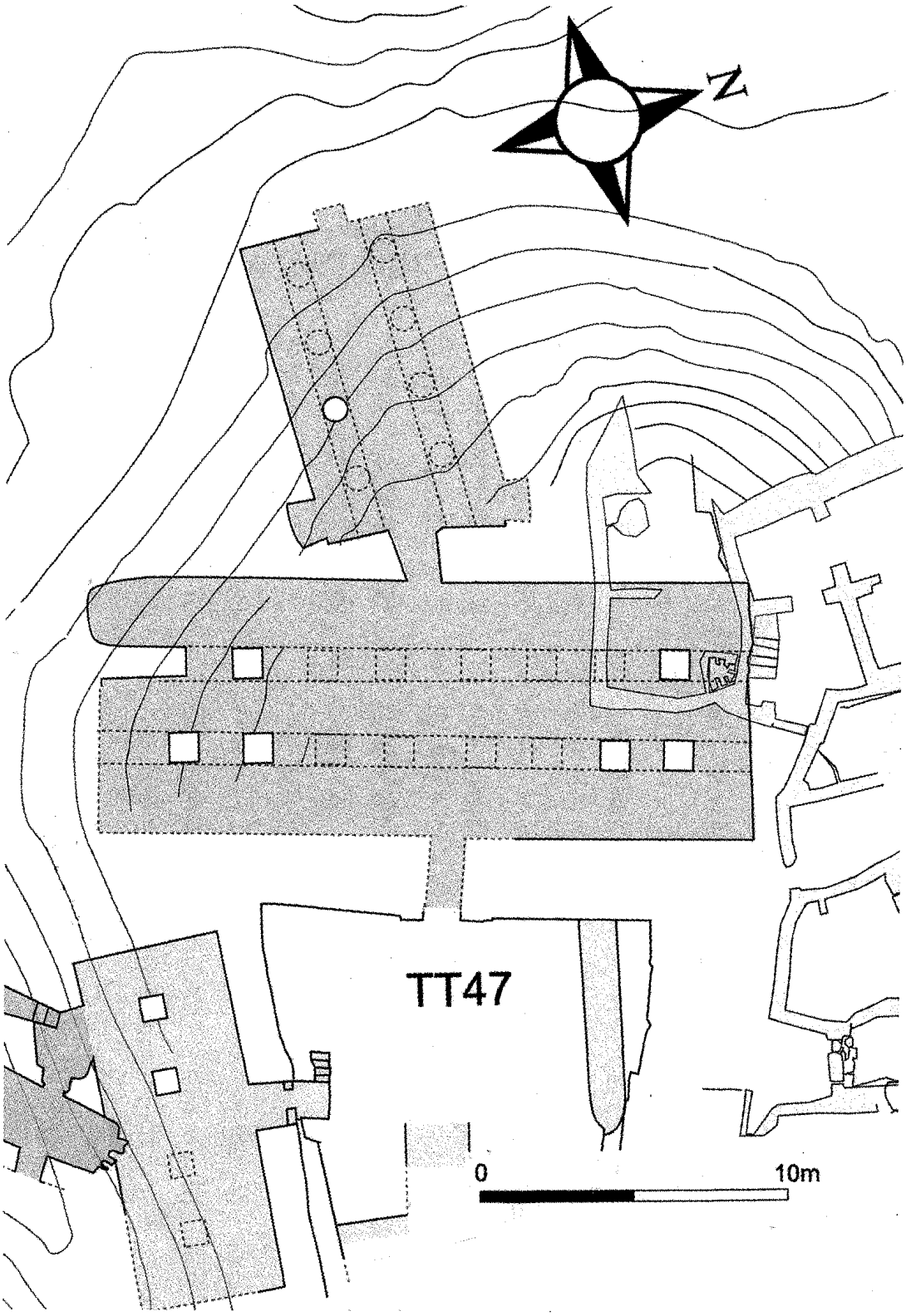


図6　ウセルハト墓（第47号墓）平面プラン図（近藤他 2015, 図3）

その後、ウセルハト墓（第四七号墓）の前庭部や前室、奥室のクリーニングを実施し、測量することにより新たな墓の平面プランを作成することが出来た（図6）。この平面プランは、これまでに公表されていたものとは全く異なるものとなっている。奥室の手前には、壁龕が南北にあり、壁龕の中には被葬者夫妻の彫像が納められていた。奥室の柱は、カーターが報告した二本だけではなく、破壊を受けているが、四本ずつ二列で八本の柱を備えた構造であったことが判明している。

発掘調査の結果、前室の天井の大部分は崩落しており、墓内部の装飾も部分的で、ほとんど未完成の状態であった。前室の柱も、カーターが左右三本ずつ二列で六本と報告しているのに対して、左右四本ずつ十六本の柱を持つ構造であったことが明らかとなった。このことから、ウセルハト墓（第四七号墓）も、図1のd、e、fの岩窟墓と同様に前室に左右四本ずつ二列の一六本の柱を持つものであり、アメンヘテプ三世末期の大型岩窟墓と共通の構造であったことが判明している。

表1は、ネクロポリス・テーベにおける前室に列が四本以上で、二列以上の柱を持つ大型岩窟墓のリストである。

この表には、アメンヘテプ三世～アメンヘテプ四世治世を中心とする大型岩窟墓が九基リスト・アップされてい

**表1　ネクロポリス・テーベの第18王朝末期の大型岩窟墓**（Eigner 1983, Tabelle 1を改変）

| 番号 | 被葬者の名前 | 時期 | 場所 | 前室（幅m） | 前室（柱の本数） |
|---|---|---|---|---|---|
| TT　47 | ウセルハト | A. Ⅲ | KH | 21.2 | 16 |
| TT　107 | ネフェルセケルウ | A. Ⅲ | SH | 28.0 | 16 |
| TT－281－ | NN | ? | QM | 26.5 | 16 |
| TT－396－ | アメンヘテプ（ハプの子） | A. Ⅲ | QM | 28.5 | 16 |
| TT　48 | アメンエムハト・スレル | A. Ⅲ | KH | 23.7 | 20 |
| TT　271 | ナイ | Ay | QM | 27.3 | 20 |
| TT　192 | ケルエフ | A. Ⅲ～A Ⅳ | AS | 24.85 | 30 |
| TT　55 | ラーメス（ラモーゼ） | A. Ⅲ～A Ⅳ | SH | 25.8 | 30 |
| TT－28－ | アメンヘテプ | A. Ⅲ～A Ⅳ | AS | 31.90 | 32 |

時期：A Ⅲ：アメンヘテプ3世　A Ⅳ：アメンヘテプ4世　Ay：アイ王
場所：AS（アル＝アサシーフ）、KH（アル＝コーカ）、SH（シェイク・アブド・アル＝クルナ）
QM（クルナト・ムラーイ）

る。その中で前室に十六本の柱を持つ四基の墓（第四七号墓、第一〇七号墓、第・二八一・号墓、第・三九六・号墓）の中で、ウセルハト墓は前室の横幅が約二一・二メートルと最も短く、ハプの子、アメンヘテプの墓と考えられるものの四分の三ほどの規模である。おそらくウセルハト墓（第四七号墓）の前室の横幅の二一・二メートルという数値は、古代エジプト尺の四〇キュービットに相当し、ラーメス墓（第五五号墓）の前室の横幅が、約五〇キュービット、そして、最大のアメンヘテプ墓（第・二八・号墓）が約六〇キュービットになるよう設計されていたと推定できる。

## まとめ

新王国第十八王朝のアメンヘテプ三世は、アメン神官団を牽制するために、メンフィスのプタハ神官団など多くの北部出身者をアメン神官団の本拠地であるカルナクのあるテーベに招聘した。また、王の治世三〇年の第一回王位更新祭（セド祭）もテーベの南に隣接したマルカタ（ペル・ハイ）で挙行したことも、アメン神官団に対して王の巨大な権力を誇示する目的で実施されたものと思われる。

王の治世三〇年以降に、ネクロポリス・テーベの岩窟墓にも明瞭な変化が見られるようになる。前述した岩窟墓の大型化は、特に顕著なものであった。それ以前、大型岩窟墓としては、シェイク・アブド・アル＝クルナ地区にあるアメンヘテプ二世治世下のケンアメン墓（第九三号墓）がある（図1j）。この墓は、未完成ながらも左右三本ずつで二列十二本（実際には未完成のため八本）の柱を持つ構造で、前室は左右五本ずつ一列十本の柱を持つものであった。

アメンヘテプ三世治世からの大型墓の特徴は、表一に示したように、前室に左右四本（あるいは五本）ずつで、二列（最大四列）十六本以上となっている。多柱の前室を特徴としている。

もうひとつの特徴としては、墓の壁面に精緻なレリーフ装飾が施されるようになったことである。テーベの岩窟墓では、岩盤が脆いためにプラスターで仕上げた壁面に絵画（壁画）を施すことが一般的であったが、アメンヘテプ三世治世になると、ウセルハト墓（第四七号墓）、アメンエムハト・スレル墓（第四八号墓）、ラーメス墓（第五五号墓）、カエムハト墓（第五七号墓）、ケルエフ墓（第一九二号墓）などでは、穿たれた壁面をプラスターで整形することなく、直接、壁面に精緻なレリーフが施されている。

このことは明らかに、石灰岩の切石ブロックにレリーフ

を施すというネクロポリス・メンフィスの技法の影響が強く現れていると言える。その背景として、メンフィス出身者とともに、メンフィス系の職人たちがテーベに移動して墓作りに従事していたことを暗示している。これらのレリーフ装飾のあるテーベ西岸の岩窟墓は、標高が八五～九〇メートルの地点にほぼ集中しており、テーベ西岸地域では、レリーフを施すことのできる良好な岩盤（クルナ石灰岩層）が、存在する場所に墓が造営されたことを示している。

また、何故、この時期に前室や奥室などに数多くの柱を配する岩窟墓が、ネクロポリス・テーベに出現したかという直接の背景については、より詳細な検討が必要であるが、ラーメス（ラモーゼ）墓（第五五号墓）の前室の柱配置（左右四本ずつ四列で、三十二本の柱）は、アメンヘテプ三世のルクソール神殿の中庭南に位置する第列柱室と全く同じであることは、非常に示唆的である。明らかに、それまでのネクロポリス・テーベの岩窟墓の前室や奥室などとは異なった機能を持つものであった。

多柱の部屋を持つアメンヘテプ三世治世の大型岩窟墓の中で。これまで平面プランが不明瞭であったウセルハト墓（第四七号墓）は、二〇〇七年十二月に開始された発掘調査によって、前室に左右四本ずつ二列で十六本の柱を持つ構造で、墓入口部を東に面していることが明らかになった。このことにより、ウセルハト墓が、アメンヘテプ三世以降の大型岩窟墓の系譜に含まれるものであることとなった。これらの大型岩窟墓の系譜の中で、やや構造を異にするものとして、アル＝コーカ地区のアメンエムハト・スレル墓（第四八号墓）（図1h）がある。今後、詳細な検討が必要とされるであろう。

墓内部のレリーフ装飾に関しては、メンフィス出身者とともにメンフィス系の職人たちが、ネクロポリス・テーベに流入したことを指摘したが、近年のネクロポリス・メンフィスの発掘調査により、メンフィスの墓の造営にテーベの絵師の存在が指摘されており（Zivie 2013）、アマルナ時代直前に北のメンフィスと南のテーベとの間で、墓作りの工人・職人たちの交流があったことが報告されている。

最後に、アメンヘテプ三世～アメンヘテプ四世治世に、突如ネクロポリス・テーベに出現した大型岩窟墓は、その後のアマルナ時代では、どのようになっていくのであろうか。アメンヘテプ四世（後のアクエンアテン王）が遷都したアマルナには、南北ふたつの岩窟墓群（北墓地と南墓地）が造営されているが、それらの中で前室に多くの柱を持つものは、僅かに南墓地の二基（第八号墓と第二五号墓）だけである。特に未完成ながら第二十五号墓は、左右

四つずつ三列の一二十四本（実際には十五本）の柱を持つ構造の墓として設計されており、ツタンカーメン墓の後に王となったアイのものである（Davies 1908）。このように、アメンヘテプ三世治世末期に出現した大型岩窟墓は、次のアマルナ時代でさらに発展するのではなく、ごく一部にしか反映されていない事実は興味深い。

## 参考文献


v. Beckerath, J. 1999 *Handbuch der Ägyptischen Königsnamen*, Maīnz.

Brack, A. & A. Brack 1980 *Das Grab des Haremhab, Theben Nr. 78*, Mainz.

Bryan, B. A. 1991 *The Reign of Thutmose IV*, 144-149 and 268.

Carter, H. 1903 "Report of Work done in Upper Egypt (1902-1903)", Annales du Service des Antiquités de l'Egypte (ASAE) , Vol.4, 177-178.

Davies, N. de G. 1908 *The Rock Tombs of Tell El-Amarna*, Part VI: Tombs of Parennefer, Tutu, and Aÿ, London.

Davies, N. de G. 1930 *The Tomb of Ken-Amun at Thebes*, Vol. I & II, New York.

Davies, N. de G. & Macadam, M. F. L. 1957 *A Corpus of Inscribed Egyptian Funerary Cones*, Part 1, Oxford.

Dorman, P. 1991 *The Tombs of Senenmut*, New York.

Eigner, D. 1983 "Das thebanische Grab des Amenhotep, Wesir von Unterägypten: die Architektur", *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 39: 39-50.

The Epigraphic Survey 1980 *The Tomb of Kheruef, Theban Tomb 192*, Oriental Institute Publications 102, Chicago.

Kampp, F. 1996 *Die thebanische Nekropole*, Theben 13, Mainz & Rhein.

O'Connor and Eric H. Cline 2001 Amenhotep III. Perspectives on His Reign, Michigan

Porter, B. and R. L. B. Moss, *Topographical Bibliography of Ancient Egyptian Hieroglyphic Texts, Reliefs and Paintings: I. The Theban Necropolis, Part II. Royal Tombs and Smaller Cemeteries*, Oxford, 1964, 670-1

Rhind, A. H. 1862 *Thebes, its Tombs and their Tenants*, London.

Sakurai, K., Sakuji, Y. and Kondo, J. 1988 *Comparative Studies of Noble Tombs in Theban Necropolis (Tomb Nos. 8, 38, 39, 48, 50, 54,57, 63, 64, 66, 74, 78, 89, 90, 91, 107, 120, 139, 147, 151, 181, 201, 253, 295)*, Tokyo.

Weigall, A. E. P. 1908 "Upper Egyptian notes", *Annales du Service des Antiquités de l'Egypte* 9: 105-112.

Zivie, Alain 2013 *La Tombe de Thoutmes*, Toulouse.

黒板勝美　一九一一「埃及に於ける發掘事業（二）」『考古学雑誌』巻一、第八号、考古學会、五一二頁。

近藤二郎　一九九四「テーベ私人墓第四七号」『エジプト学研

究』第二号、早稲田大学エジプト学会、五〇～六〇頁。
近藤二郎　一九九六「ネクロポリス・テーベの領域の確立」『エジプト学研究』第四号、早稲田大学エジプト学会、四三～五七頁
近藤二郎　一九九八「アメンヘテプ三世とその時代」『岩波講座・世界歴史二　オリエント世界』岩波書店、二三三～二五一頁。
近藤二郎　二〇〇〇「ネクロポリス・テーベにおける岩窟墓の再利用の問題―再利用の痕跡が巧妙に隠されている幾つかの墓の事例から―」『史観』第一四二冊、早稲田大学史学会、七六～九一頁。
近藤二郎　二〇〇八「古代エジプト二都物語：メンフィスとテーベ」『エジプト考古学（改訂版）』早稲田大学文学学術院、七九～八四頁。
近藤二郎［監修・執筆］二〇一五「アメンヘテプ三世の王妃ティイのレリーフ」『クレオパトラとエジプトの王妃展図録』東京国立博物館、ＮＨＫ、一六七頁。
近藤二郎・吉村作治・柏木裕之・河合　望・高橋寿光　二〇一四「第六次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第二〇号、早稲田大学エジプト学会、四三～五七頁
近藤二郎・吉村作治・河合　望・菊地敬夫・柏木裕之・竹野内恵太・福田莉紗　二〇一五「第七次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第二一号、早稲田大学エジプト学会、一九～四四頁。
屋形禎亮　一九六九「イク＝エン＝アテンとその時代」『岩波講座・世界歴史一　古代オリエント世界　地中海世界Ⅰ』岩波書店、二一二～一四頁。
屋形禎亮　一九七〇「エジプト第十八王朝における神官任命―王の任命権と神官団―」『史学研究』七六、東京教育大学、（『古代エジプトの歴史と社会』屋形禎亮編、同成社、二〇〇三年、三五五～三九九頁所収）

＊本文中の王の治世年は、全てv. Beckerath, J.の年代に準拠している。
＊尚、本文中の岩窟墓の標高に関しては、The Survey of Egypt（一九二四年）の一〇〇〇分の一の遺跡図を使用した。